日光角化症が起因する扁平上皮癌の発症傾向の検証

繁浪 幸代[1]　安部 奈穂美[2]　落合 保子[2]　荒木 藍[1]
加村 菜月[1]　大沼 秀行[3]
小阪 真二[4]
[1]島根県立中央病院　情報システム管理室　[2]株式会社　ソラスト
[3]島根県立中央病院　病理組織診断科　[4]島根県立中央病院　病院長

【目的】

当院は院内独自の院内がん登録ツールを構築し運用を行っている。ツールには病理診断システムからがんと診断した情報が連携しているが、病理医の指定した連携データの扁平上皮癌に院内がん登録では対象外の日光角化症が含まれていた。日光角化症とは、慢性的に日光や紫外線を浴びることによって頭や顔などに発生する上皮内がんである。高齢になるほど発生頻度は高くなり、この腫瘍は近年増加傾向にある。日光角化症を放置すると進行して扁平上皮癌になることから、病理報告書と院内がん登録データを使って「日光角化症が起因する扁平上皮癌」の発症傾向の検証行ったので報告する。

【方法】

(1) 1999 年以降の病理報告書から「日光角化症」「光線角化症」「solar keratosis」「actinic keratosis」をキーワードとして抽出を行った。抽出された 197 件の中から「日光角化症」と「日光角化症が起因する扁平上皮癌」に分類し年齢による発症傾向の分析を行った。

(2) その内、院内がん登録データ 2005 年～2016 年診断の皮膚に発症した扁平上皮癌 86 件から「日光角化症が起因する扁平上皮癌」を抽出し好発部位・年齢・ステージ別で分析を行った。

【結果】

(1) 病理報告書では「日光角化症」が 111 件、「日光角化症が起因する扁平上皮癌」が 43 件で、その内 11 件は日光角化症が同時に報告されていた。また、日光角化症と確定できない疑症例を含んだ「その他」が 43 件だった。年齢別の件数では「日光角化症」が 60 代 12 件・70 代 35 件・80 代 48 件・90 代 16 件で 70～80 代が全体の約 74%を占め（図 1)、「日光角化症が起因する扁平上皮癌」は 60 代 2 件・70 代 7 件・80 代 19 件・90 代 15 件で 80 歳以上が約 79%を占めていた（図 2)。どちらも 60 歳以降で発症し年齢とともに増加傾向にあるが（図 3)、年齢別の割合で見ると、「日光角化症が起因する扁平上皮癌」が 60 代の 14%から 90 代では 48%と約半分を占めていた（図 4)。

（2）院内がん登録データでは「日光角化症が起因する扁平上皮癌」は 24 件であり、発症部位はすべて日光角化症の好発部位と同じＣ44.１（眼瞼）、Ｃ44.２（外耳）、Ｃ44.３（頬部・こめかみ）であった（図 5）。また、好発部位における扁平上皮癌 46 件の中、日光角化症が起因する癌が約半分の 52%を占めていた。ステージ別では約 75%がⅠ期以上の浸潤癌で所属リンパ節転移のあるⅢ期も含まれていた（図６）。年齢別では 60 代 1 件・70 代 4 件・80 代 7 件・90 代 12 件で 80 歳以上が約 79%を占め病理報告書の結果と同じ傾向であった（図７）。

【考察】

日光角化症は 60 歳以降で発症し 80 歳以降に扁平上皮癌へ進行することが示唆された。また、好発部位では浸潤性の扁平上皮癌が多く、日光角化症の治療により浸潤癌は減少すると考える。日光角化症は高齢者の発症頻度が高く年々増加傾向にあり、放置すれば浸潤癌へと進行するため対策が必要な極初期の上皮内扁平上皮癌である。がん対策の基礎データである院内がん登録では日光角化症は登録対象外であるが、同じ皮膚癌であるボーエン病は登録対象である。今後は日光角化症もがん対策の基礎データとして登録することを考慮すべきである。今回は当院のみの検証であるが、島根県のような高齢者県では日光角化症を起因とする扁平上皮癌は増加傾向にあると推察される。院内がん登録の対象外であっても県立の地域がん診療連携拠点病院として県民に必要な情報を発信していくことが当院の役割だと考える。

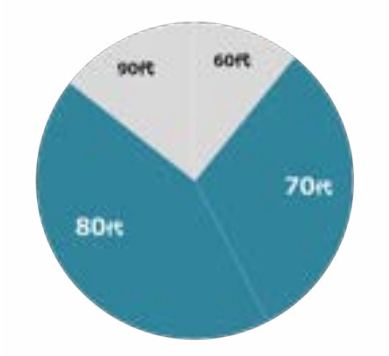

図１．日光角化症の年齢別割合

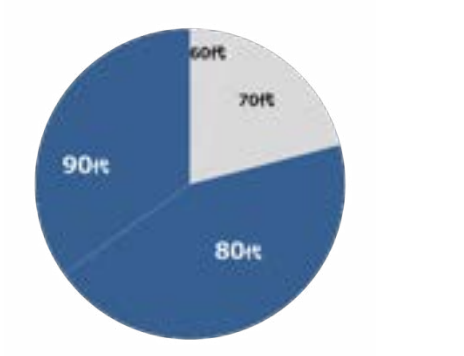

図２．日光角化症が起因する扁平上癌の年齢別割合

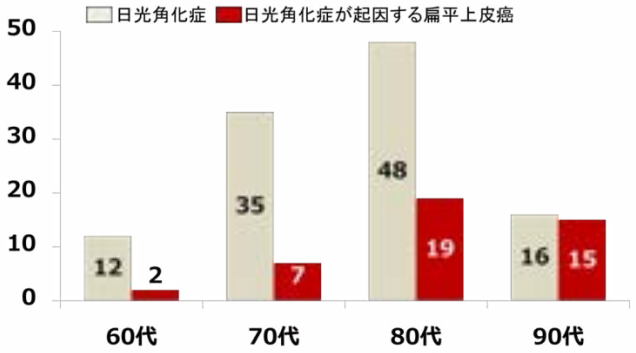

図３．年齢別・日光角化症と日光角化症が起因する扁平上皮癌の件数

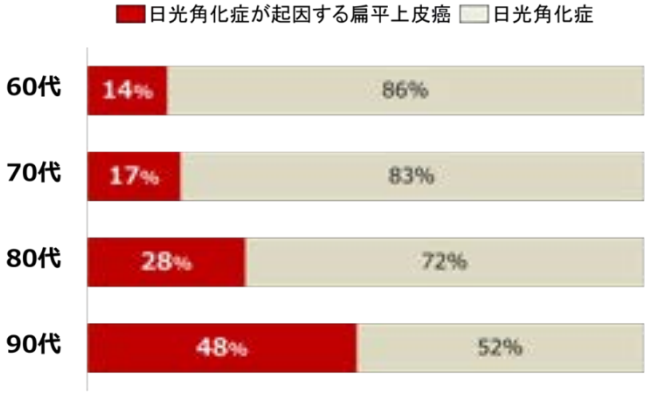

図４．年齢別・日光角化症と日光角化症が起因する扁平上皮癌の割合

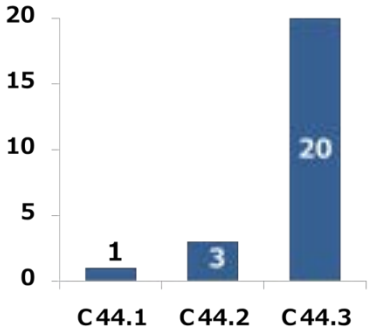

図５．部位別件数

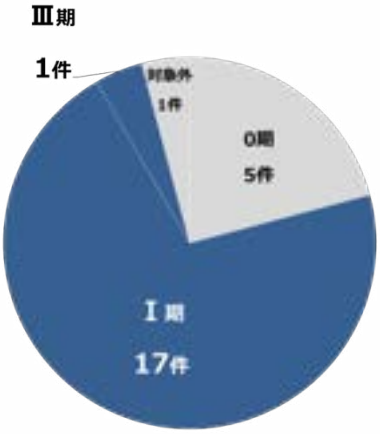

図６．ステージ別割合

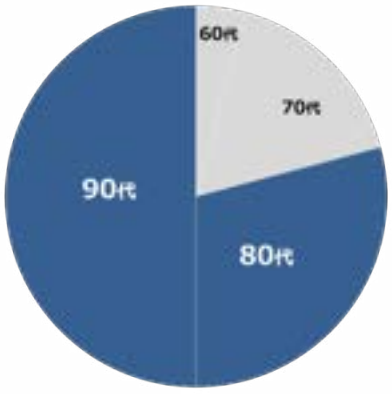

図７．年齢別割合